
安城家の日々

ヤマダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

安城家の日々

【Nコード】

N6393S

【作者名】

ヤマダ

【あらすじ】

代々不思議の力を持つ安城家。当主の一人娘、病弱な春乃と従兄のキョウ。穏やかに日々を過ごしていた二人だが、ある日転機が訪れる。

プロローグ

夕暮れの裏山には化け物バケモノが出る　　というのは、学園に伝わる有名な噂である。

私立御影学園。

緑の多い落ち着いた環境の中で小・中・高の一貫教育を受けられるこの学園は、質の高い教育に定評があり、両家の親からも人気がある。

この場合の「裏山」というのは、文字通り学園の裏手にある月影山を指している。どちらかといえば山の麓に学校があるというのが正しい感じではあるが、長年「裏山」と呼ばれ続けているために気にする者はいない。

化け物が出る　　なんて子供じみた噂は、面白半分で伝えられるのが普通だろう。それが中高生の間ならなおさら。

しかし、この学園の生徒たちは皆、この噂を本気で信じていた。初等部のみならず、中等部、高等部の生徒達までもが、もちろん誰もが、一度は「嘘だ」と思う。噂を疑う。

だが結局は、また信じることになる。信じざるを得なくなる。

なぜなら、彼らは聞くことになるからだ。　　”化け物”の声を。

例えば、忘れ物を取りに戻った教室。

例えば、運動部の掛け声が響くグラウンドの隅。

例えば、友達との会話がふと途切れた瞬間。

夕暮れの中、風に乗って聞こえてくる。

世にも悲しげな、化け物の声。

キヨウと春乃

夕暮れの残光が、御影山を朱に染めている。
立ち入り禁止になっているその山を、一人の少年が駆けていた。
はっ、はっ。

御影学園の制服を身に着けた少年は、息を切らして走る。何かを探すように、辺りを注意深く見まわしながら。

その顔は焦燥していて、興味本位で“化け物”を探しにやってくる生徒たちのそれとは、明らかに一線を画していた。

突然、少年が立ち止った。

少年の視線の先で、茂みがガサガサと音を立てている。

風は、なかった。

少年のこめかみを、汗が滑り落ちた。

ガサリ

それが、姿を現した。

*

少女が目を覚ますと、すでに部屋は薄暗くなっていた。

少女は体を起こして、不安げにきよろきよろと辺りを見回した。

家の中はしんとして、人のいる気配無なかった。隣に立っている離れも同様だろう。今は、夕暮れだから。

少女は布団を抜け出すと、そばに畳んでおかれていた薄手のカーディガンを寝巻の上から羽織った。もう夏も盛りになっていたが、これを着ないと心配性な従兄が五月蠅いのである。

襖をそつと閉めて、少女は長い廊下を進みだした。

*

それは、敢えて例えるならば、犬だ。

ひどく悲しげな眼をした、灰色の小さな子犬。

一見弱々しそうであるが、それと目を合わせた瞬間に、少年の全身から汗が噴き出した。幼少のころから何度も見ているはずなのに、なぜか毎度おぞましさ、嫌悪感のようなものを感じてしまう。

少年は一度目を閉じて呼吸を整えた。

表情を引き締めて目を開けると、少年は手にしていた太刀を抜いた。

(発動)

子犬のようなそれがとびかかってくると同時に、少年は左手を伸ばす。

そしてそのまま、それを掴んだ。

少年の指の触れたところから、ぴきりぴきりと音を立てて、それが凍る。

3秒と経たずに、それは氷の塊となった。

少年は、氷塊になったそれを自分の左手ごと地面に置いた。そして、右手に持った太刀で、一突きにした。

ぱりいんと澄んだ音がして　そして、後には何も残っていないかった。子犬のようなそれも、欠片となったはずの氷も、跡形もなく消え失せていた。

少年は地面に刺さった刀を鞘に納めると、慣れた様子で下山し始めた。

*

少女は、だだっ広い庭の向こうに人影を発見して、ほっと胸をなでおろした。向こうもこちらに気がついて、小走りに駆けてくる。その顔を見て、少女の体から安心のために力が抜けた。立ちくらみを起こして倒れかけた体を、すんでのところで少年が支えた。

「馬鹿、何やってんだ春乃！」

開口一番、少年は怒鳴った。毎度のことであるが、春乃は素直に「ごめんなさい」と謝った。

「お前は何でそういつつもいつつも……」
「だって」

なんとか自分の足で立ちながら、春乃はつぶやいた。

「心配なんだもん、キョウが」

キョウ 安城響弥は、他人よりまず自分を心配しろという言葉
葉を飲み込んだ。春乃の顔が赤く火照っている。夏の暑さのせいだ
けではなかった。

「わかったよ。ほら、帰るぞ」

諦めて響弥がそういうと、春乃はこくんとうなずいた。

ふらつき気味の春乃に合わせて、ゆっくり歩く。

縁側から家の中に入った。長い廊下を歩いて、ようやく春乃の部屋にたどり着く。

春乃を先に部屋に行かせて、響弥は台所でコップに水を汲んだ。暑くなってきたので、水分補給に気を遣わなくてはならない。

一杯飲みほして布団に入ると、やはり無理していたのだろう、春乃はすくと眠りに落ちてしまった。コップを流しにおいてから、今度は洗面所に向かう。使い古された小さめのタオルを濡らして、部屋に引き返す。そのまま額に乗せようとしたが、額に汗が浮かんでいるのを見て、気を変えた。春乃を起こさないようにそつと額や首筋を拭ってから、もう一度タオルを絞りなおす。今度こそ額に乗せて、やっと響弥は部屋を出た。

これら一連のことは、すべて響弥のの日常だった。

授業を終えたら、すぐに帰宅すること。

三日に一度ほど現れるあれを倒すこと。

しょっちゅう熱を出す従妹の看病をすること。

それらをこなしながら、響弥の日々は過ぎていた。

キツカケ

夕食まで、響弥は離れの自室で予習をして過ごした。

安城家の住まいは、御影山と繋がった土地、御影学園の隣である。もともと何百年という単位での昔に、この辺りの土地を切り開いたのが安城家のご先祖で、それ以来安城家はずっとずっと大地主だった。学校がある場所もとは安城家のものだし、現在も町中に不動産を所有している。

現在、古い（そして広い）母屋で寝起きしているのは、春乃と父である時雨^{しぐれ}。20年ほど前に建てられた離れ　といっても普通の家と何ら変わりはないが　で暮らしているのは響弥、響弥の父で時雨の兄・旭^{あさひ}、母・若菜の3人である。とはいえ、食事をしたりテレビを見たりといったことは大抵母屋ですることがほとんどなので、実質は同居だった。

7時過ぎに、若菜が返ってくる気配がした。これから休む間もなく夕食を作り、遅れて帰宅する旭と時雨を待って8時過ぎにご飯、というのが通例だ。

7時45分ごろ、表に車の止まる音。父親二人組の帰宅である。

響弥はここで腰を上げた。渡り廊下を歩いて、母屋の食堂に向かう。母におかえり、と言いかけたが、それより先に口を開いたのは若菜だった。

「あんたちちょっと春ちゃん呼んできて頂戴」

「…おう」

響弥は大人しく返事をした。

長い廊下を歩いて歩いて、春乃の部屋にたどり着く。襖を開ける。春乃は廊下の電気の明るさで目を覚ましたらしく、ぐずるように身を捻じらせた。

「春乃、メシ」

響弥が少し大きめの声で言うと、「いらない……」と返ってきた。

まだ熱が下がっていないらしく、その声は弱々しい。

「やっぱりか、と響弥はため息をついた。

「お前朝も昼も全然食ってねえだろ」

具合が悪い時の春乃は、全く食欲を出さない。朝食は食べずに眠っていた。昼は一人になるからと、若菜がおかゆを作っておいたのだが、手つかずのままなのは確認済みだ。響弥も無理はさせたくないのだが、春乃は放っておくと必要な栄養を摂取しないのだ。

春乃が黙ったままなので、響弥は仕方なく無理やり春乃の体を起こした。

「ほら。行くぞ」

促すと、春乃はようやく諦めてふらふらと立ち上がった。そのまま覚束ない足取りで部屋を出ていく。

響弥はそのあとを、見守るようになって行った。

「うーん、まだ熱いわねえ」

若菜が春乃の額に手を当ててつぶやく。

「明日になっても下がらなかつたら、先生に来てもらいましょうね」

春乃は大人しくこくんとうなずいた。

春乃に母親はいない。正確には、12年前から。安城芳乃のしよは、春乃が3歳の時に亡くなった。

だから、春乃にとって若菜は母親のようなものだ。若菜の前では、春乃はとびきり素直だ。

「さ、ご飯にしようじゃないか」

そう言ったのは時雨だ。

「起きてくれて丁度よかった。春乃と響弥に話したいことがあるんだ」

「話して？」

響弥は首を傾げた。春乃も不思議そうに父親を見る。

「親戚の子……春乃と同じ年なんだけどね。暫く、うちで預かろうと思う」

響弥の目が点になった。
「……どういふ事？」

かくて、来たる

世界は、ひとつではない。

安城家では、そう伝えられている。

こちらに現代という世界があるように、あちら側にもまた、世界があるのだと。

ともすれば廃れてしまいそうな言い伝え。だが、現在も安城家の面々は、それを事実として受け入れている。

なぜなら、彼らはもともと“あちら側”の人間だからだ。

その証拠が、直系に近い人間が使える不思議の力だ。例えば、響弥ならば氷を操る能力。何も無いところから氷を出すことも可能だし、またそこにある氷の形を自在に操ることができる。

ただしこの能力は直系だからといって全員が使えるわけではない。今現在、安城家の当主は時雨だが、その娘である春乃には特別な能力はない。その時雨も四人兄弟だが、能力があるのは長女の暁あかつきと二男の時雨だけ。長男の旭と末っ子の雛子ひなこにはない。ちなみに暁は高校卒業を期に失踪し、雛子は財閥の息子の所へ嫁いだ。響弥の兄である奏かなでも能力があるが、奏は遠方の大学に通うため一人暮らし中だった。つまり現在安城家で能力が使えるのは時雨と響弥の二人だけということになる。

「どうも、強い能力を持つてる子みたいだね」

と、時雨は言った。

「この間、片桐家の皆さんと会う機会があったときにね、相談されたんだ」

安城家を本家、宗家とするならば、片桐家は分家にあたる。分家にも安城の血が流れているとはいえ、能力を持つ者が出ることはほとんど無い。まれにいたりとしても、それこそスプーン曲げのようなささやかなものがほとんどだ。

ところが、本家と比べて遜色ないほどの能力者が出たという。

周りも本人も戸惑っているため、しばらく安城家に置かせてほしいということらしい。能力の扱い方もこちらでは教えられないからと。

「にしてもなあ……」

響弥は何度目かわからないため息をついた。

外では地面から陽炎が立ち上り、セミが激しく鳴いている。

春乃じゃない方の従妹が遊びに来たり、母屋を片づけたりするうちに、夏休みはとづくに終盤に入っていた。今日はもう片桐の能力者である少年が来る日だ。

響弥はなんとなく憂鬱だ。別に何か不都合があるわけではないから叔父の提案はすんなり受け入れたが、いざ来るとなると落ち着かない。年下が苦手なのだ。春乃は例外だが。

その春乃はといえば、響弥と真逆だった。

さつきから立ったり座ったり、クッションを抱きしめたり、テレビをつけてはチャンネルを変えてみたり。明らかにそわそわしていて、落ち着きがない。

鬱陶しいが、響弥は春乃を咎めることはしなかった。春乃が如何に今日を楽しみにしていたか、よく知っているからだ。

春乃は何か「いつもと違うこと」が大好きなのだ。お祭りに行ったりみんな遊びに行ったりといったこと。学校行事はその最たるもので、春乃はいつも遠足やら運動会やらを楽しみにしていたが、病気で出れないことも数えきれないくらいあった。

けれど今回は、たとえ熱を出したところで中止にはならない。春乃が安心して楽しみにできるものだった。

車の止まる音がした。

「あっ！」

座って時計とにらめっこしていた春乃が、ぱっと立ち上がった。そのままダッシュで表へ出ていく。

仕方なく響弥もあとに続いた。

邂逅

響弥が一步外に出ると、夏の日差しが容赦なく降り注いできた。

じりじりと肌が焼かれていくような感覚。光が眩しくて、目を細めて手をかざしながら車のほつに目をやると、背の高い少年の姿が見える。

「キョウ、キョウ、早くっ！」

春乃が興奮した声で叫ぶ。響弥が仕方なく走り寄ると、春乃は待ちきれなさそうにさっそく話しかける。

「こんにちは、安城春乃です！今日から、よろしくね！」

少年は少し面食らったようだったが、すぐに礼儀正しく頭を下げた。

「片桐真白ましろです。お世話になります」

二人を見た真白の目は、驚くほどに落ち着いていた。不安そうな様子は欠片もない。

まっすぐに立つと、身長が180センチ弱ある響弥よりも少し高い。響弥は改めて、武道をやっていた人間だな、と実感した。ずっと剣道をしているということ、すこぶる姿勢がいい。

高1の春乃と同じ年だというから、響弥にとっては一つ年下なのだが、あまり実感が湧かない。

「安城響弥。……キョウでいいよ」

手を差し出す。とりあえず握手。真白はもう一度軽く頭を下げて、しっかりと響弥の手を握った。

二人が握手した瞬間、いきなり突風が吹いた。

ごうつと音を立てて、駆け抜けていく。春乃がちいさく悲鳴を上げた。

「何だ……？」

この時期に突風なんかほとんど吹かない。響弥は首を傾げた。

真白も驚いたように目を見開いて、なぜか手のひらを握ったり開

いたりしている。

「さあ、暑いしそろそろ中に入ろう」

時雨の穏やかな声で全員我に返った。春乃が子供のように「私が荷物運ぶ！」と真白の足元の荷物に手をかけた。

「いい。自分で運ぶ……重いから」

真白は遠慮がちに断るも、春乃は両手で荷物を持ち上げた。やはりかなり重かったらしく、腕がふるぶると震えている。如何にも無理して運んでいますという様子なので、響弥は思わず強引に荷物を奪い取った。

「何すんのよ、キョウ」

と春乃は頬を膨らませた。

「お前が運んでたら何時間かかるかわかんねえからな」

「俺、自分で運びます」

真白が慌てたように荷物を取り返そうとした。こっちにその気はなくても、真白にとっては年の差があるという意識がしっかり働いているらしい。

「いいよ、これくらい。……あと、敬語、使わなくていい」

やっぱり、年下は苦手だ。

そう思いながら、響弥は家の中に入っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6393s/>

安城家の日々

2011年5月9日00時10分発行